

読んでみたい この一冊

大阪産業経済リサーチセンター
主任研究員 佐野 浩



『年収は「住むところ」で決まる 雇用とイノベーションの都市経済学』

●エンリコ・モレッティ 著 池村千秋 訳 株式会社プレジデント社(2,000円+税)

本書のタイトルを見た印象として、逆の関係、「年収によって住むところが決まる」ならば自明なことなのに、タイトルをみると「なぜ？」と考えさせられてしまう。しかし、「年収は住むところで決まる」という関係は、考えると非常に納得の行くものでもあるし、今後の地域振興を考えるにあたって非常に重要な視点を与えてくれる。

そのことをイノベティブな人が多く集まっている地域を例に考えてみたい。そのような地域では、一部のイノベティブな人だけが高収入を得ているのではない。イノベティブな人は嗜好性が強いことや、どんな人にとっても生活に必要なサービスは存在するため、例えば、美容院やコンビニといった、まったく関係の無いような労働者でも、他地域と比較して高い収入を得ることができる。その結果、イノベティブな地域においては、イノベティブな人だけではなく、あらゆる労働者が恩恵を受けることができるため、本書のタイトルのように「地域(=住むところ)によって年収が決まる」とも言えるわけである。

このような関係性は、日本でも普通にみることができる。例えば、最低賃金を比較した場合、東京と地方では200円以上もの差が存在しているが、それは東京の生活費が高いからという福祉的な観点からだけではなく、東京は生産性が高いため、企業はそれだけの賃金を支払えるという観点もあるだろう。それらの理由により、東京の方が同一の仕事であっても賃金が高いとも考えることができる。

ところで、イノベティブな地域においては、なぜイノベティブな人は高収入を得られるのだろうか。イノベーターにとっては、他のイノベーターの存在や、自身の活動をサポートする企業が多いことが重要であり、そのような地域の方が生産性が高いためと考えられる。

この理由は、それ以外にも重要な示唆を与えて

くれる。イノベティブな活動は他者の存在からも影響を受けているため、他地域へ移転すると生産性が大きく低下しやすい。そのため、イノベティブな人が集まる地域にはよりイノベティブな人が集まるといった自己増強的な機能が働くとともに、イノベティブ産業は地域に比較的粘着性があることを説明している。

このメカニズムは、製造業の工場とは大きく異なる。工場は、機械の導入により比較的地域に関係なく操業ができるため、地域との関係性・粘着性は比較的弱い。そのため、製造業の工場が主要な核であった地域は、工場の移転によって衰退してしまう地域が多い。その一方で、イノベティブな地域は、優秀な人をひきつけることにより、ますます繁栄する。その結果、地域間格差が引き起こされることにもつながっていくことになる。

本書の内容からは、地域に何やら宿命的な問題を感じてしまうが、それでは地域振興のためにはどうしたらいいのだろうか。個人であれば、「年収は住むところによって決まる」のだから、高収入が得られる地域に移転すればいいだけの話だが、地域ではそういうわけにはいかない。本書を踏まえると、イノベーションを生み出すのは人であるため、人と人をつなぐ「地域」の役割の再認識や、他地域へは移転できない地域固有の要素を生かすなど、グローバル化が進展する昨今においては、逆に動かない要素である、地域の重要性が増してきている。またIT技術の発展により、「年収は住むところで決まるとは限らない」という動きもみられるようになってきたと思われる。

【著者略歴】

経済学者。カリフォルニア大学バークレー校教授。専門は労働経済学、都市経済学、地域経済学。イタリア生まれ。カリフォルニア大学バークレー校でPh.D.取得。